校異源氏物語・まほろし

春のひかりをみ給につけてもいとゝくれまとひたる様にのみ御心ひとつはかなしさのあらたまるへくもあらぬにとにはれいのやうに人〻まいり給ひなとすれと御心ちなやましきさまにもてなし給てみすの内にのみおはします兵部卿の宮わたりたまへるにそたゝうちとけたるかたにてたいめんし給はんとて御せうそこきこえたまふ

わかやとは花もてはやす人もなしなにゝか春のたつねきつらんみやうち涙くみ給て

香をとめてきつるかひなく大方の花のたよりといひやなすへきこうはいのしたにあゆみいて給へる御さまのいとなつかしきにそこれよりほかにみはやすへき人なくやとみ給へる花はほのかにひらけさしつゝおかしきほとの匂なり御あそひもなくれいにかはりたることおほかり女房なとも年ころへにけるはすみそめのいろこまやかにてきつゝかなしさもあらためかたく思ひさますへき世なく恋きこゆるにたえて御かたかたにもわたり給はすまきれなくみたてまつるをなくさめにてなれつかうまつれるとしころまめやかに御心とゝめてなとはあらさりしかと時　くはみはなたぬやうにおほしたりつる人〻もなか　くかゝるさひしき御ひとりねになりてはいとおほそうにもてなし給てよるの御とのいなとにもこれかれとあまたをおましのあたりひきさけつゝさふらはせ給つれ　くなるまゝにいにしへの物かたりなとし給おり　くもありなこりなき御ひしり心のふかくなりゆくにつけてもさしもありはつましかりけることにつけつゝなか比ものうらめしうおほしたるけしきのときときみえ給しなとをおほしいつるにななとてたはふれにてもまたまめやかに心くるしきことにつけてもさやうなるこゝろをみえたてまつりけんなに事もらう　くしくおはせし御心はえなりしかは人のふかき心もいとようみしり給なからゑんしはて給ことはなかりしかと一わたりつゝはいかならむとすらんとおほしたりしをすこしにても心をみたり給けむことのいとおしうくやしう覚給さまむねよりもあまる心ちし給ふそのおりのことの心をしりいまもちかうつかうまつる人〻はほの　くきこえいつるもあり入道の宮のわたりはしめ給へりしほとそのおりはしも色にはさらにいたし給はさ

りしかと事にふれつゝあちきなのわさやとおもひたまへりしけしきのあはれなりしなかにも雪ふりたりしあかつきにたちやすらひてわか身もひえいるやうにおほえて空のけしきはけしかりしにいとなつかしうおいらかなるものからそてのいたうなきぬらし給へりけるをひきかくしせめてまきらはし給へりしほとのようゐなとをよもすから夢にても又はいかならむ世にかとおほしつゝけらるあけほのにしもさうしにおるゝ女房なるへしいみしうもつもりにける雪かなといふこゑをきゝつけ給へるたゝそのおりのこゝちするに御かたはらのさひしきもいふかたなくかなし

うき世には雪きえなんと思つゝおもひのほかになをそ程ふるれいのまきらはしには御てうつめしてをこなひし給うつみたる火おこしいてゝ御火おけまいらす中納言君中将の君なとおまへちかくて御物かたりきこゆひとりねつねよりもさひしかりつる夜のさまかなかくてもいとよくおもひすましつへかりける世をはかなくもかゝつらひけるかなとうちなかめ給われさへうちすてゝはこの人ゝのいとゝなけきわひんことのあはれにいとおしかるへきなとみわたし給しのひやかにうちをこなひつゝ経なとよみ給へる御声をよろしう思はんことにてたに涙とまるましきをましてそてのしからみせきあへぬまてあはれにあけくれみたてまつる人ゝのこゝちつきせすおもひきこゆこの世につけてはあかすおもふへきことおさ　くあるましうたかき身にはうまれなから又人よりことにくちおしき契にもありけるかなとおもふことたえす世のはかなくうきをしらすへくほとけなとのをきて給へるみなるへしそれをしひてしらぬかほになからふれはかくいまはの夕ちかきするゑにいみしきことのとちめをみつるにすくせの程もみつからの心のきはものこりなくみはてゝ心やすきにいまなん露のほたしなくなりにたるをこれかれかくてありしよりけにめならす人ゝのいまはとてゆきわかれんほとこそいまひときはのこゝろみたれぬへけれいとはかなしかしわろかりける心の程かなとて御めおしのこひかくし給にまきれすやかてこほるゝ御涙をみたてまつる人ゝましてせきとめむかたなしさてうちすてられたてまつりなんかうれはしさををの　くうちいてまほしけれとさもえきこえすむせかへりてやみぬかくのみなけきあかし給へるあけほのなかめくらし給へる夕くれなとのしめやかなるおり　くはかのおしなへてにはおほしたらさりし人ゝをおまへちかくてかやうの御物かたりなとをし給中将の君とてさふらふはまたちいさくよりみたまひなれにしをいとしのひつゝみ給すくさすやありけむいとかたはらいたき事に思ひてなれきこえさりけるをかくうせ給て後はそのかたにはあらす人より

もらうたきものに心とゝめ給へりしかたさまにもかの御かたみのすちにつけてそあはれにおもほしける心はせかたちなともめやすくてうなひまつにおほえたるけはひたゝならましよりはらう　くしとおもほすうとき人にはさらにみえ給はすかんたちめなともむつましき御はらからの宮たちなとつねにまいりたまへれとたいめんし給ことおさ　くなし人にむかはむほとはかりはさかしく思ひしつめ心おさめむとおもふとも月ころにほけにたらむ身のありさまかたくなしきひかことましりてすゑの世の人にもてなやまれむ後の名さへうたてあるへしおもひほれてなん人にもみえさむなるといはれんもおなしことなれと猶をとにきゝておもひやる事のかたはなるよりもみくるしきことのめにみるはこよなくきはまさりてをこなりとおほせは大将の君なとにたにみすへたてゝそたいめむし給けるかく心かはりし給へるやうに人のいひつたふへきころほひをたにおもひのとめてこそはとねんしすくし給つゝうき世をもそむきやり給はす御方かたにまれにもうちほのめき給ふにつけてはまついとせきかたき涙の雨のみふりまされはいとわりなくていつかたにもおほつかなきさまにてすくし給后の宮はうちにまいらせ給て三宮をそさう　くしき御なくさめにはおはしまさせ給けるはゝののたまひしかはとてたいのおまへの紅梅はいとゝりわきてうしろみありき給ふをいとあはれとみたてまつり給きさらきになれは花の木とものさかりなるもまたしきもこすゑおかしうかすみわたれるにかの御かたみの紅梅に鴬のはなやかになきいてたれはたちいてゝ御覧す

　うへてみし花のあるしもなきやとにしらすかほにてきゐる鴬とうそふきありかせ給春ふかくなりゆくまゝにおまへのありさまいにしへにかはらぬをめて給ふかたにはあらねとしつ心なくなに事につけてもむねいたうおほさるれは大かたこの世のほかのやうにとりのねもきこえさらむ山のすゑゆかしうのみいとゝなりまさり給山吹なとの心ちよけにさきみたれたるもうちつけに露けくのみみなされ給ほかの花はひとへちりて八重さく花桜さかりすきてかはさくらはひらけ藤はをくれて色つきなとこそはすめるをそのをそくとき花のこゝろをよくわきて色　くをつくしうへをき給しかは時をわすれすにほひみちたるにわか宮まろか桜はさきにけりいかてひさしくちらさし木のめくりに帳をたてゝかたひらをあけすは風もえ吹よらしとかしこう思ひえたりとおもひてのたまふかほのいとうつくしきにもうちゑまれ給ぬおほふはかりの袖もとめけん人よりはいとかしこうおほしより給へりしかしなとこの宮はかりをそもてあそひにみたてまつり給ふ君になれきこえんこともこりすくなしやいのちといふものいましは

しかゝつらふへくともたいめんはえあらしかしとてれいのなみたくみ給へれはいとものしとおほしてはゝのゝたまひし事をまか　くしうのたまふとてふしめになりて御その袖をひきまさくりなとしつゝまきらはしおはすゝみのまのかうらむにおしかゝりておまへの庭をもみすのうちをもみわたしてなかめ給ふ女房なともかの御形見の色かへぬもありれいの色あひなるもあやなとはなやかにはあらすみつからの御なをしも色はよのつねなれとことさらやつしてむもんをたてまつれり御しつらひなともいとおろそかに事そきてさひしく心ほそけにしめやかなれは

　いまはとてあらしやはてんなき人の心とゝめし春のかきねを人やりならすかなしうおほさるゝいとつれ　くなれは入道の宮の御かたにわたり給にわか宮も人にいたかれておはしましてこなたのわか君とはしりあそひ花おしみ給心はえともふかゝらすいといはけなし宮は仏のおまへにて経をそよみ給けるなにはかりふかうおほしとれる御道心にもあらさりしかともこの世にうらめしく御心みたるゝ事もおはせすのとやかなるまゝにまきれなくをこなひたまひてひとかたにおもひはなれ給へるもいとうらやましくかくあまへ給へる女の御心さしにたにをくれぬることゝくちおしうおほさるあかの花のゆふはへしていとおもしろくみゆれは春に心よせたりし人なくて花の色もすさましくのみゝなさるゝを仏の御かさりにてこそみるへかりけれとの給てたいのまへの山吹こそ猶世にみえぬ花のさまなれふさのおほきさなとよしなたかくなとはをきてさりける花にやあらんはなやかにゝきはゝしきかたはいとおもしろき物になんありけるうへし人なき春ともしらすかほにてつねよりもにほひかさねたるこそあはれに侍との給御いらへに谷には春もとなに心もなくきこえ給をことしもこそあれ心うくもとおほさるゝにつけてもまつかやうのはかなきことにつけてはそのことのさらてもありなむかしと思ふにたかふゝしなくてもやみにしかなといはけなかりし程よりの御ありさまをいてなに事そやありしとおほしいつるにはまつそのおりかのおりかと　くしうらうらうしう匂おほかりし心さまもてなしことの葉のみ思ひつゝけられ給ふにれいの涙もろさはふとこほれいてぬるもいとくるしゆふくれの霞たと　くしくおかしきほとなれはやかてあかしの御かたにわたり給へりひさしうさしものそき給はぬにおほえなきおりなれはうちおとろかるれとさまようけはひ心にくゝもてつけてなをこそ人にはまさりたれとみ給につけてはまたかうさまにはあらてかれはさまことにこそゆへよしをもゝてなし給へりしかとおほしくらへらるゝにもおもかけに恋しうかなしさのみまされはいかに

してなくさむへき心そといとくらへくるしうこなたにてはのとやかにむかし物
かたりなとし給人をあはれと心とゝめむはいとわろかへきことゝいにしへより
思ひえてすへていかなるかたにもこの世にしふとまるへき事なく心つかひをせ
しにおほかたの世につけて身のいたつらにはふれぬへかりし比ほひなとゝさま
かうさまにおもひめくらしゝに命をもみつからすてつへく野山のするゑにはふら
かさんにことなるさはりあるましくなむおもひなりしをするゑの世にいまはかき
りの程ちかき身にてしもあるましきほたしおほうかゝつらひていまゝてすくし
てけるか心よはうもゝとかしきことなとさしてひとつすちのかなしさにのみは
の給はねとおほしたるさまのことはりに心くるしきをいとおしうみたてまつり
て大方の人めになにはかりおしけなき人たに心の中のほたしをのつからおほう
侍なるをましていかてかは心やすくもおほしすてんさやうにあさへたる事はか
へりてかる　くしきもとかしさなともたちいてゝなか　くなることなとはへる
をおほしたつほとにふきやうに侍らんやつゑにすみはてさせ給かたふかうはへ
らむとおもひやられ侍てこそいにしへのためしなとをきゝ侍につけても心にお
とろかれおもふよりたかふゝしありて世をいとふついてになるとかそれは猶わ
るき事とこそなをしはしおほしのとめさせ給て宮たちなともをとなひさせ給て
まことにうこきなかるへき御ありさまにみたてまつりなさせ給はむまてはみた
れなく侍らんこそ心やすくもうれしくも侍へけれなといとをとなひてきこえた
るけしきいとめやすしさまておもひのとめむ心ふかさこそあさきにをとりぬへ
けれなとの給てむかしより物をおもふことなとかたりいてたまふなかに故后の
宮のかくれ給へりし春なむ花の色をみてもまことに心あらはとおほえしそれは
おほかたの世につけておかしかりし御ありさまをゝさなくよりみたてまつりし
みてさるとちめのかなしさも人よりことにおほえしなりみつからとりわく心さ
しにも物のあはれはよらぬわさなりとしへぬる人にをくれて心おさめむかたな
くわすれかたきもたゝかゝるなかのかなしさのみにはあらすをさなき程よりお
ほしたてしありさまもろともにおいぬるすゑの世にうちすてられてわか身も人
の身もおもひつゝけらるゝかなしさのたへかたきになんすへて物のあはれもゆ
へある事もおかしきすちもひろうおもひめくらす方かた　くそふ事のあさから
すなるになむありけるなと夜ふくるまてむかしいまの御物かたりにかくてもあ
かしつへきよをとおほしなからかへり給を女も物あはれにおもふへしわか御心
にもあやしうもなりにける心のほとかなとおほしゝらるさても又れいの御をこ
なひに夜なかになりてそひるのおましにいとかりそめによりふし給つとめて御

ふみたてまつり給に

なく　くもかへりにしかなかりの世はいつこもついのとこよならぬによへの御ありさまはうらめしけなりしかといとかくあらぬさまにおほしほれたる御けしきの心くるしさに身のうへはさしをかれて涙くまれたまふ

かりかゑしなはしろ水のたえしよりうつりし花のかけをたにみすふりかたくよしあるかきさまにもなまめさましき物におほしたりしをするゑの世にはかたみに心はせをみしるとちにてうしろやすきかたにはうちたのむへく思ひかはし給ひなからまたさりとてひたふるにはたうちとけすゆへありてもてなしたまへりし心おきてを人はさしもみしらさりきかしなとおほしいつせめてさう　くしき時はかやうにたゝおほかたにうちほのめき給おり　くもありむかしの御ありさまにはなこりなくなりにたるへし夏の御かたより御衣かへの御さうそくたてまつり給とて

夏衣たちかへてけるけふはかりふるき思ひもすゝみやはせぬ御返

は衣のうすきにかはるけふよりはうつ蝉の世そいとゝかなしきまつりの日いとつれ　くにてけふは物みるとて人〳〵心ちよけならむかしとてみやしろのありさまなとおほしやる女房なといかにさう　くしからむさとにしのひていてゝみよかしなとの給中将の君のひんかしおもてにうたゝねしたるをあゆみをはしてみ給へはいとさゝやかにおかしきさましておきあかりたりつらつきはなやかににほひたるかほをもてかくしてすこしふくたみたるかみのかゝりなとおかしけなりくれなゐのきはみたるけそひたるはかまくわんさういろのひとへいとこきにひ色にくろきなとうるはしからすかさなりてもからきぬもぬきすへしたりけるをとかくひきかけなとするにあふひをかたはらにをきたりけるをよりてとり給ていかにとかやこのなこそわすれにけれとの給へは

さもこそはよるへの水にみくさゐめけふのかさしよ名さへわするゝとはちらひてきこゆけにといとおしくて

大かたはおもひすてゝし世なれともあふひは猶やつみおかすへきなとひとりはかりをはおほしはなたぬけしきなりさみたれはいとゝなかめくらし給よりほかのことなくさう　くしきに十よ日の月はなやかにさしいてたる雲まのめつらしきに大将の君おまへにさふらひ給花たちはなの月影にいときはやかにみゆるかほりもをひ風なつかしけれは千世をならせるこゑもせなんとまたるゝ程にはかにたちいつるむら雲のけしきいとあやにくにていとおとろ　くしうふりくる雨にそひてさとふく風にとうろもふきまとはしてそらくらき心ちするにま

とをうつこゑなとめつらしからぬふることをうちすし給へるもおりからにやいもかかきねにをとなはせまほしき御声なりひとりすみはことにかはることなけれとあやしうさう　くしくこそありけれふかき山すみせんにもかくて身をならはしたらむはこよなう心すみぬへきわさなりけりなとの給て女房こゝにくた物なとまいらせよおのこともめさんもこと　くしき程なりなとのたまふ心にはたゝ空をなかめ給ふ御けしきのつきせす心くるしけれはかくのみおほしまきれすは御をこなひにも心すまし給はんことかたくやとみたてまつり給ほのかにみし御おもかけたにわすれかたしましてことはりそかしと思ひゐ給へり昨日けふとおもひ給ふるほとに御はてもやう　くちかうなり侍にけりいかやうにかおきておほしめすらむと申たまへはなにはかりよのつねならぬ事をかはものせんかの心さしをかれたるこくらくのまんたらなとこのたひなん供養すへき経なともあまたありけるをなにかしそうつみなその心くはしくきゝをきたなれは又くはへてすへきことゝもゝかのそうつのいはむにしたかひてなむものすへきなとの給かやうの事もとよりとりたてゝおほしおきてけるはうしろやすきわさなれとこの世にはかりそめの御契なりけりとみ給にはかたみといふはかりとゝめきこえ給へる人たにものし給はぬこそくちおしう侍れと申給へはそれはかりならすいのちなかき人ゝにもさやうなる事のおほかたすくなかりけるみつからのくちおしさにこそゝこにこそはかとはひろけ給はめなとの給なに事につけてもしのひかたき御心よはさのつゝましくてすきにしことといたうもの給いてぬにまたれつる山ほとゝきすのほのかにうちなきたるもいかにしりてかときく人たゝならすそらをなかめ給ふ大将

なき人をしのふるよひのむら雨にぬれてやきつる山ほとゝきすとていとゝ

ほとゝきす君につてなんふるさとのはなたち花はいまそさかりと女房なとおほくいひあつめたれとゝとめつ大将の君はやかて御殿ゐにさふらひ給さひしき御ひとりねの心くるしけれは時ゝかやうにさふらひ給におはせし世はいとけとをかりしおましのあたりのいたうもたちはなれぬなとにつけてもおもひ出らるゝことともおほかりいとあつきころすゝしきかたにてなかめ給に池のはちすのさかりなるをみ給にいかにおほかるなとまつおほしいてらるゝにほれ　くしくてつく　くとおはするほとに日もくれにけり日くらしのこゑはなやかなるにおまへのなてしこのゆふはへをひとりのみゝ給ふはけにそかひなかりける

つれ　くと我なきくらす夏の日をかことかましきむしのこゑ哉蛍のいとおほうとひかふも夕殿にほたるとんてとれいのふることもかゝるすちにのみくち

なれたまへり

よるをしるほたるをみてもかなしきは時そともなきおもひなりけり七月七日もれいにかはりたることおほく御あそひなともし給はてつれ　くになかめくらしたまひて星逢みる人もなしまた夜ふかうひと所おき給てつまとおしあけたまへるにせんさいの露いとしけくわたとのゝとよりとをりてみわたさるれはいて給て

七夕のあふせは雲のよそにみてわかれの庭に露そをきそふかせのをとさへたゝならすなりゆくころしも御法事のいとなみにてついたちころはまきらはしけなりいまゝてへにける月日よとおほすにもあきれてあかしくらし給ふ御正日にはかみしもの人〻みないもゐしてかのまんたらなとけふそ供養せさせ給れいのよひの御をこなひに御てうつなとまいらする中将の君のあふきに

君こふる涙はきはもなき物をけふをはなにのはてといふらんとかきつけたるをとりてみ給て

人こふる我身もするゑになりゆけとのこりおほかる涙なりけりとかきそへたまふ九月になりて九日わたおほひたる菊を御らんして

もろともにおきゐし菊のしら露もひとりたもとにかゝる秋かな神無月にはおほかたも時雨かちなる比いとゝなかめ給てゆふくれの空のけしきもえもいはぬ心ほそさにふりしかとゝひとりこちおはす雲井をわたる雁のつはさもうらやましくまほられ給ふ

おほそらをかよふまほろし夢にたにみえこぬ玉のゆくゑたつねよなにことにつけてもまきれすのみ月日にそへておほさる五節なといひて世中そこはかとなくいまめかしけなるころ大将殿の君たちわらは殿上し給へるいてまいり給へりおなし程にてふたりいとうつくしきさま也御おちの頭中将蔵人少将なとをみにてあをすりのすかたともきよけにめやすくてみなうちつゝきもてかしつきつゝもろともにまいり給おもふ事なけなるさまともをみ給にいにしへあやしかりし日かけのおりさすかにおほしいてらるへし

宮人はとよのあかりといそくけふ日かけもしらてくらしつるかなことしをはかくてしのひすくしつれはいまはと世をさり給へきほとちかくおほしまうくるにあはれなる事つきせすやう　くさるへきことゝも御心の中におほしつゝけてさふらふ人〻にもほと　くにつけてもの給ひなとおとろ　くしくいまなんかきりとしなしたまはねとちかくさふらふ人〻は御ほいとけ給へきけしきとみたてまつるまゝにとしのくれゆくも心ほそくかなしきことかきりなしおちとまり

てかたはなるへき人の御ふみともやれはおしとおほされけるにやすこしつゝのこし給へりけるをものゝついてに御覧しつけてやらせ給ひなとするにかのすまのころほひところ　くよりたてまつれ給けるもあるなかにかの御てなるはことにゆひあはせてそありけるみつからしをき給ける事なれとひさしうなりける世のことゝおほすにたゝいまのやうなるすみつきなとけに千とせの形見にしつへかりけるをみすなりぬへきよとおほせはかひなくてうとからぬ人ゝ二三人はかりおまへにてやらせ給ふいとかゝらぬほとのことにてたにすきにし人のあとゝみるはあはれなるをましていとゝかきくらしそれともみわかれぬまてふりおつる御涙の水くきになかれそふを人もあまり心よはしとみたてまつるへきかかたはらいたうはしたなけれはおしやりたまひて

　しての山こえにし人をしたふとて跡をみつゝも猶まとふかなさふらふ人ゝもまほにはえひきひろけねとそれとほの　くみゆるに心まとひともをろかならすこの世なからとをからぬ御わかれのほとをいみしとおほしけるまゝにかいたまへることのはけにそのをりよりもせきあへぬかなしさやらんかたなしいとうたていまひときはの御心まとひもめゝしく人わるくなりぬへけれはよくもみ給はてこまやかにかき給へるかたはらに

　かきつめてみるもかひなしもしほ草おなし雲井の煙とをなれとかきつけてみなやかせ給御仏名もことしはかりにこそはとおほせはにやつねよりもことに尺定のころ　くなとあはれにおほさるゆくすゑなかきことをこひねかふもほとけのきゝ給はん事かたはらいたし雪いたうふりてまめやかにつもりにけり導師のまかつるをおまへにめしてさか月なとつねのさほうよりもさしわかせ給てことにろくなとたまはすとしころひさしくまいりおほやけにもつかうまつりて御覧しなれたる御導師の頭はやう　く色かはりてさふらふもあはれにおほさるれいの宮たちかんたちめなとあまたまいり給へり梅の花のわつかにけしきはみはしめて雪にもてはやされたるほとおかしきを御あそひなともありぬへけれと猶ことしまてはものゝねもむせひぬへき心ちし給へはときによりたる物うちすんしなとはかりそせさせ給まことや導師のさか月のついてに

　春までの命もしらす雪のうちに色つく梅をけふかさしてん御返

　千世の春みるへき花といのりをきてわか身そ雪とゝもにふりぬる人ゝおほくよみをきたれともらしつその日そいてたまへる御かたちむかしの御ひかりにも又おほくそひてありかたくめてたくみえ給をこのふりぬるよはひのそうはあいなう涙もとゝめさりけりとしくれぬとおほすも心ほそきにわか宮のなやらは

んにをとたかかるへきことなにわさをせさせんとはしりありき給もおかしき御ありさまをみさらんことゝよろつにしのひかたし

物おもふとすくる月日もしらぬまに年もわか世もけふやつきぬるついたちのほとのことつねよりことなるへくとをきてさせ給みこたち大臣の御ひきいて物しな　くのろくともなにとなうおほしまうけてとそ